水上の綾

白石ライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水上の綾

【Ｎコード】
Ｎ１３９６ＢＡ

【作者名】
白石ライ

【あらすじ】
現代日本に少し似た、架空の国の物語。国の最高位の人達を巻き込んだ、ただの意地っ張り女×意地っ張り女の友情（？）の物語。

第一話

広大なリカー大陸より北東に海を渡った先に浮かぶ小さな島。そこに「綾見（あやみ）」という国が誕生してから、およそ千二百年を超える年月が経っていた。神力を持つ巫女によって興されたその国は、建国の巫女亡き後、政治を司る機（はたの）の一族と、祭祀を司る織（おりえ）の一族、この二本柱によって、現在まで変わらず国が治められている。

代々機の直系から選ばれる皇帝に対して、織には直系の女から選ばれる巫女姫という役職がある。これは神に仕える職務の最高位であり、年間を通して、神祇官らと共に様々な祭式を執り行う。時が流れ、かつての神力は失われたものの、国民からは国の象徴として篤く敬われ、皇帝を凌ぐほどの人気を誇っていた。

今代の巫女は、代替わりしてまだ八ヶ月足らずと経験は浅いが、大層美しく、粛々と儀式を執り行う姿はまさに国の象徴に相応しいと国中の評判で――。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊

年も暮れ行く冬の未明。神宮の一日はまだ日も昇らぬうちから始まる。内宮、巫女姫の居室としてあてがわれた一角。吐く息を白く凍らせる廊下を、千（せん）は足早に過ぎていった。目的の一室に着き、襖の前で膝をつく。

「姫様」

声をかけるが、応答は無し。いつものことなので、特に気にはし

ない。
「失礼いたします」
部屋の主は聞いてなどいないだろうが、声をかけるのは忘れない。
襖を開けると、薄暗い部屋の奥の方に、布団にくるまって丸まる何かが見える。千はそっと部屋に入り、エアコンのスイッチを入れた。

建国から千二百余年。科学技術は日に日に進んでいる。神宮とて例外無くその恩恵を受けているのだ。伝統が集結する場所として譲れない部分は守りつつ、時代の移り変わりを拒絶しない。柔軟に対応してきたからこそ、千二百年もの長きに渡って、国の柱として在り続けてこられたのだ。
そもそも、エアコン無しの部屋で暮らせと言えば、この部屋の主は三日で逃げ出したに違いない。

千は布団の塊に近づく。その途中で、布団の外に転がっている枕を拾った。主の寝相の悪さは今に始まったことではない。
「姫様。起床のお時間です」
塊に向かって声をかける。くぐもったうめき声が聞こえた。しかし塊は動かない。
千は気にせず、着替えの準備を始めた。新しい下着、朝の祈祷の際の礼服、足袋などを出し終わったところで、再度塊に声をかける。
「姫様」
「……ぁあ？」
布団の中から、実に不機嫌そうな女の声が聞こえた。
「そろそろ起きて下さいね」
「わかった……」
絶対わかってない。その証拠に塊はぴくりとも動かない。しかし千は焦らない。コツはこうやって徐々に覚醒へと導いていくことだ。焦って無理矢理起こしては後で恐ろしいことになる。

次に千はバスルームへ向かった。ぬるいシャワーにかかり、次いで真水で禊(みそぎ)をするのが、姫の朝の習慣だ。朝の禊は巫女姫には避けられないものである。そのための準備を整えてから、部屋に戻った。室内が暖まってきたことによって、小さく縮こまっていた布団の塊がだんだん伸びてきていた。

「姫様。シャワーの準備もできていますよ。そろそろ起きて下さい」

「あと十分……」

「だめです。早くしないと朝の祈祷に間に合いません」

「じゃあ五分……」

なかなかにしぶとい。と思っていたら、部屋の隅に放り出されているゲーム機とコントローラーを見つけた。

「姫様……。もしかして、また夜更かししてゲームをなさっていたわけではありませんよねえ……。」

知らず、千の声も低くなる。

「年末年始は忙しいので、しっかり睡眠を取られるよう、あれほどお願いしましたのに」

「必殺技覚えたー……」

「聞いてません。さあ、そろそろ本気で起きて下さい。あと五分寝るのと、今起きるのと、そう変わりませんよ」

少し間があって、チッと舌打ちが聞こえたかと思うと、やっとずるずると布団から這い出てきた。

ボサボサの黒髪、寝起きの顔は不機嫌丸出しのひどいもので、折角の美人が形無しである。この姿を写真に収めて国民に見せても、誰もこれがあの巫女姫・春比奈(はるひな)だとは信じまい。人々にとっての彼女とは、神に祈りを捧げているときの、あの神々しいばかりの横顔だとか、あの美しい舞姿なのだ。

春比奈姫はもう一度舌打ちを下さって、ふらふらとバスルームへ消えていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　春比奈は実に寝起きが悪い。中々起きない上に、起きたかと思えばものすごく不機嫌だ。千にはそう大したことには思えないのだが、ほかの近侍にしてみるとそれはそれは恐ろしいらしく、誰も進んでこの仕事をやろうとしない。いつも春比奈の起床時刻が近づくと、誰もが忙しいふりをして、千に押し付けようとするのだ。別に春比奈とて悪気があるわけではなく、たとえ夢から覚める瞬間だけは、自分の眠りを妨げる相手を心底憎んでいたとしても、完全に目を覚ました頃にはもう忘れている。だから気にする必要は無いと思うのだが、慣れてない者にとっては、あの舌打ち一つで寿命が縮むのだとか。

　というわけで、今のところ、春比奈を何とかバスルームまで送るのが、千の一日の最初の仕事だった。

第二話

年の暮れから正月にかけて、この神宮はとにかく忙しい。特に大晦日から一月七日の人日（じんじつ）の節句までの八日間は、連日儀式や宴があり、息をつく暇も無い。現在は、その準備に追われる毎日だ。

千は、春比奈の朝餉の膳を取りに、厨房へ向かった。途中、忙しく立ち働く人々に、おはようございます、と軽く頭を下げる。しかし返ってくるのは余所余所しい視線だけだった。明らかに避けられている。侍従職に就いている人の中で、千とまともな会話をするものはおらず、嫌われていると言ってもいいのかもしれない。

原因は、理解しているつもりだった。しかしそれを気にしてはいない。現状を変えたいとも特に思わない。他人の評価が欲しいわけではないのだ。千は自分の意思で宮に居る。ここで巫女姫の近侍としての務めを果たすことだけが、千の望みだった。

＊＊＊

「大野」

春比奈の私室へ向かう途中で、後ろから声をかえられた。振り返ると、略式の式服を纏った青年が近づいてくるところだった。整った顔立ちからは、どことなく軽薄な印象を受ける。

「おはようございます、明日良（あすら）様。お勤めご苦労様です」

盆を持っているため深々とはできないが、千はお辞儀をした。明日良は織の本家の人間で、今は大学生だが、来年からは神祇官として神宮に勤めることになっている。現在も両手に書類を抱え、忙し

そうだ。宮の頂点に座する巫女姫からアルバイトの清掃係に至るまで多忙を極めるこの時期、本家の者とて例外ではない。
「……何か御用でしょうか」
千がそう尋ねたのは、明日良が眉をひそめて千を見つめながらも口はつぐんだままだったからで、しかし彼は短くため息をついてその表情を打ち消し、言った。
「今日のスケジュール、ちょっと変更があるから春比奈に伝えといて。市役所のお祓いの後に予定してた元日の衣装合わせ、明日に回してくれって。午後は予定通り、還元の儀の舞のリハね」
「はい」
明日良は春比奈の従兄で、年が近いこともあって仲が良い。明日良に限らず織の者はみな、公の場以外では春比奈のことは呼び捨てで、普通の親戚の一員として扱う。
「俺が直接行こうとも思ったんだけど。俺これから会議に参加しなきゃなんなくて。よろしく。それと、あいつちゃんと睡眠と栄養しっかり取ってる？なんか今日うっすら隈があった気がすんだけど」
「それは……」
痛いところをつかれた。
「実は、昨夜遅くまでゲームをなさっていたらしく」
わざわざ言われなくとも、主の健康管理は近侍の務めだというのに。近侍として恥ずかしい。と反省していると。
「あ、ごめん。多分それ、俺が貸したヤツだわ」
「……は？」
どうやら元凶はこの人のようだ。
「絶対面白いからやっとけって、オススメしといたんだよ。あれやり出すとハマっちゃうんだよね。必殺技覚えるまでは！ってずるずる続けちゃって、中々止めらんなくて」
さすがは従兄、似た者同士か。
「……せめてこの繁忙期が過ぎるまでは、没収させていただいても？」

「あー、うん。頼むわ。あいつのためにも。そしてそのまま大野が預かっといて。俺のためにも」
「畏まりました……」
なんて自制心の無い人たちだ。
少し悲しく思っていると、明日良がまた、言いたいことを無理矢理飲み込んでいるような顔でこちらを見ていた。
「どうかなさいましたか、明日良様」
「……いや。何か、大野からそういう言葉づかいされると、変な感じがして。前みたいに、先輩って呼んでくれりゃいいのに」
明日良は少し苦笑いだ。千は目を伏せて言った。
「今の私は、織の家の方々に、お仕えする身ですので」
斜め上からの視線を感じる。恐らく明日良にとっては、千がそうやって言うことさえも納得がいかないのだろう。これ以上何かを言われる前に、辞することにした。
「それでは明日良様。姫様の朝餉が冷めてしまいますので、失礼させていただきます。ご伝言、確かに姫様にお伝えいたします」
明日良の方を見ないまま一礼して、その場を離れた。角を曲がるまで、視線は離れなかった。

第三話

神宮に関わる数々の役職の一つ、侍従職。その中でも、巫女姫の近侍という職は、最も競争率の高いものではないだろうか。自身も近侍である筝子（そうこ）は常々そう思っている。

国民のあこがれ、巫女姫。その最も近くに侍り、世話ができるのだ。しかも当の巫女姫が若く美しいとくれば、一体どれほどの女性が履歴書を送ったことだろう。

しかし登用されるのはその中のほんの一握りだ。ミーハーな気持ちだけでは当然務まるはずも無く、重要な責務を担う巫女姫を補佐できるだけの、相応の能力が求められる。であるからして、採用されたということは、自分の能力を認められたということでもあるのだと、筝子は自負をもって日々務めに励んでいた。

侍従職に就く人の中には、先代から勤めている者も多くいるが、巫女姫の近侍だけは、代替わりと共に一掃される。そして新しい近侍はできるだけ巫女姫と同年代の女性から選ばれるのが望ましいのだが、その巫女姫が年若い場合、やはり同年代の女性では仕事をこなすことは難しく、巫女姫より一回り以上年上の女性が近侍になることも珍しくはなかった。実際、今回登用された八人の近侍も、最年長の者は春比奈より十も上の三十歳だ。その中で二十四歳の筝子は、採用の通知が届いた時、恐らく自分が最年少だろうと思った。そして、姫様と最も年の近い近侍として、良く仕え、良き相談相手となろう、姫様が心を許せるような近侍になろう、と決心したのだ。

だから、初めて他の近侍達と顔を合わせた時には驚いた。まさか、弱冠十九歳にして近侍に登用された者がいるとは思ってもいなかったから。

それが、大野千だった。

＊＊＊

「それでさー、あのドラマ、犯人役の人がめっちゃかっこよくない？」
「ええ、私もそう思います。モデル出身だそうですよ」
「そうなの？知らなかったー。演技もうまいよね」
「その人が出演している映画が、少し前まで上映されていましたよ。興味がおありでしたら、ＤＶＤ化されたらお持ちしましょうか」
「まじで？見たい見たい！ありがとう、筝子ちゃん！あ、そうだ。それならさ、筝子ちゃんも一緒にここで見ようよ」
「わ、私が……そんな、よろしいんですか？」
「いいんじゃない？折角ここの画面デカイし。仕事終わった後なら大丈夫でしょ？」
「しかし……恐れ多いことでございます」
「や、ほんと、そんなむつかしく考えなくていいから。気楽においでよ」
「ありがたいお言葉です」
なんと光栄なことだろう。筝子にとってそれはとても魅力的な誘いだった。
織の人間には、ざっくばらんな性格の者が多く、その親しみやすさが人気の理由の一つでもあった。筝子の主である春比奈も同様で、近侍にも気安く声をかけてくれる心優しい主人だ。特に普段から筝子にはよく話しかけ、重用してくれている。休憩時間は、テレビの話題やオシャレの話題など、普通の二十代の女性が好む話題で盛り上がることが多かった。
筝子にとって春比奈は、敬愛すべき主だった。明るく、優しく、

美しい。近侍とも同じ目線で笑い合い、気安く声をかけてくれる。寝起きや不機嫌な時は恐ろしいものの、気難しいということもない。少しだらしないところがあったり、たまに小さな失敗をしてしまうところも、かえって世話のしがいがあって、実によかった。巫女姫としての威厳が足りない、立ち居振る舞いがなってない、との苦言も聞こえるが、巫女姫候補の末端に居ての突然の任命にも関わらず、春比奈は努力していると箏子は思う。それに舞や誉歌（ほまれうた）は、歴代の巫女と比べても負けてはいないと評判だ。

そんな主に仕えることができて、自分は果報者だと思った。さらにその主からは重用され、ＤＶＤ観賞まで誘われ、近侍の中では最も心を許されているのではないかと思うと、もっともっと頑張らねば、と気が引き締まった。

そう、春比奈は、最も年の近い千よりも、箏子を重用してくれる。むしろ、千に対しては、側に仕えるのを快く思っていないようなのである。箏子は今でも、あの日の春比奈の剣幕を忘れていない。

『出て行きなさいよ！あんたなんかに世話されたくないっ……！！』

春比奈が声を荒げたのは、箏子の知る限り、その一度きりだ。

第四話

「姫様、失礼いたします。朝餉をお持ちしました」
襖の向こうからの声に、春比奈が「どうぞ」と返す。襖を開けて入ってきたのは、千だった。それを認めた春比奈が、露骨に嫌そうな顔をする。対して千は平然としたまま、朝餉の支度をしている。
春比奈が短い祈りを捧げて食べ始めると、千は「明日良様より、本日の日程の変更について御伝言を承っております。召し上がりながらでいいのでお聞き下さい」と前置きして、説明を始めた。
「朝食の後、市役所に赴いて、年の瀬の厄祓い式を執り行っていただきますが、その後に予定されていた、元日の式典での舞装束の試着。これはまだ修正の必要があるらしく、見合わせられることとなりました。このために入れておいた時間は空きますので、もしお疲れのようでしたら少し仮眠を取られてはいかがでしょうか。午後からは、予定通り、還元の儀の舞の予行となっております」
千は淀みなくすらすらと言った。相変わらず表情に乏しい。春比奈は、そんな千に目を向けることなく聞いた。
「還元の儀の舞ってー……。『千楽』だっけ？」
「いえ、それは越年の儀です。還元の儀では、『夕雁』を奉納していただきます」
「……あたしが今回舞うのって、全部でいくつあるの」
「還元の儀にて『夕雁』、越年の儀にて『千楽』、日迎会にて『鳳来』。元日の式典では『綾見』。四日の、皇族をお迎えしての宴では『天瀬』。人日の式典で『若菜』。合わせて六つとなっております」
「……」
「二日・三日・五日・六日の式典での舞は、本家の方がなさいますが、誉歌の奉唱は毎日ございますので。ついでに申し上げておきますと、姫様が元日からの七日間で奉唱なさる誉歌は一日に一つずつ。

順番は、元日より四番、七番、十二番、二番、九番、十五番、三番となっています」
「……」
よくもまあ、こんなにすらすらと言えるものだと箏子は感心してしまった。自分もこの程度は把握しているが、千のように空ですらすらと言えるだろうか。春比奈などは、一気に言われて軽く混乱しているというのに。
「これらを一覧にした書面を文机に置いておりますので、後ほどご確認下さい。また、大晦日までの日程を記したものも置いてあります。今日のように日程が変更になった場合、口頭でお伝えすると共に、そちらの書面にも書き添えておきますので、度々のご確認をお願いします。正月の七日間の詳細な日程は、今日中にも明日良様が届けてくださるとのことです」
少し忘れっぽいところもある春比奈の先回りをしている点も、抜かりが無い。
「……」
「何かご質問などございませんか」
「……無い」
「では御前失礼いたします」
そして用が終わればさっさと出て行く。春比奈が千を快く思わないので、千を含め近侍達は、できるだけ千が春比奈の側に寄らないよう、気を遣って仕事を分担していた。よって今までは、千が春比奈の側に寄るのは朝の起床の時だけ、しかもこの時は相手が誰だろうと春比奈は不機嫌である。
しかしこの時期は誰もが忙しく、そういうことばかりを気にしてもいられないため、春比奈と千が顔を合わせることが増えてきていた。
千が退室してからも、しばらく春比奈はしかめ面で、箏子は居心地の悪い思いをした。

第五話

　箏子が春比奈の私室で待機していると、舞の予行を終えた春比奈が別の近侍を伴って戻ってきた。すでに舞装束は脱ぎ、くつろげる服に着替えている。
「お帰りなさいませ、姫様」
　舞はかなり神経を集中させねばならないものと聞く。特に今日の稽古は本番と同じく、重い舞装束を身に着けてのものだったので、体力自慢の春比奈も心身ともに少し疲れているようだった。肩をぐるぐる回している。
「ただいま……。あー、肩凝った」
「お疲れでございましょう」
「うん。っつーかね、腹減った……あれ？なんかいい匂いがする……あっ！！」
　机の上のビニール袋を見つけた春比奈が、飛んできた。
「ショギ屋のたこ焼きっ！！」
　いそいそと袋から出し、蓋を開ける。ソースの強い香りが辺りに漂った。
「うっわ、あたしこれ大好きなんだ。ちょうど食べたいなあって思ってたんだよね」
「はい、実は、あの、先ほど……」
「これ箏子ちゃんが買ってきてくれたの？気が利くね、ありがとう。一緒に食べようよ」
「いえ、あの、つい先ほど大野さんが持ってきました」
　それを聞いた瞬間、春比奈の動きがぴたっと止まった。露骨に顔がしかめられる。チッと舌打ちまで聞こえた。それが自分に向けられたものではないとわかっていても、箏子には恐ろしかった。春比奈はなまじ美人なので、余計迫力があるのだ。
「……まあ、たこ焼きに罪は無い」

そう言って、春比奈は動きを再開させた。たこ焼きに爪楊枝を刺し、豪快に一つ丸々口に入れる。まだ熱いのに平気で咀嚼しており、猫舌な筝子にはそれが少し羨ましかった。
「美味いぃぃ……。筝子ちゃんも食べていいよ」
「いえ、私は結構ですから。どうぞ姫様が全部お召し上がり下さい」
「いやいや、これ2パックもあるから、あたし一人じゃ食べきれない。希恵（きえ）さんも食べて」
春比奈は、筝子と、ここまで付き添ってきた希恵にも爪楊枝を渡した。主の前でたこ焼きを頬張るなど無礼な気もしたが、当の主が強く勧めるのだから致し方無い。筝子はたこ焼きに爪楊枝を刺そうとして、ふと違和感を感じた。
「あれ……。これ、ネギが乗ってませんね」
ショギ屋のたこ焼きと言えば、大きいタコの入ったたこ焼きの上に、鰹節とネギがたっぷり乗せられているのが特徴である。まさか店主が忘れたのだろうかと筝子が訝しんでいると、春比奈がまた顔をしかめていた。
「それは、多分……あたしがネギ嫌いだから」
筝子にも、希恵にも初耳だった。今までも食事の中にネギが入っていることはあって、その時も春比奈は何も言わずに食べていたから。
「申し訳ありません。存じませんでした。言って下さってよろしかったのですよ」
「料理方にも申し付けておきますので」
「謝ることじゃないよ。料理方にも言わなくていい。別に食べれないってわけじゃないし、この年になってネギ嫌いってのもかっこ悪いから、何にも言わなかっただけ。気にしなくていいよ」
と春比奈は言うものの、やはり気になる。それに、何故千はそれを知っていたのだろう。その辺りも気になる。しかし春比奈に尋ねるわけにもいかないし、千に聞くのもはばかられる。
もやもやとしたものを抱えながらも、二人は春比奈の勧めるまま、

ネギ抜きのたこ焼きを頬張った。

どことなくまだ憮然とした表情の春比奈が、部屋の隅に目をやった。何かに気づいたらしく、眉をひそめる。「どうかなさいましたか？」と希恵が尋ねた。

「……あたしのゲーム機、無くない？」

箏子はぎくりとした。できれば今気づいて欲しくなかった。しかし気づかれてしまった以上、言わないわけにはいかない。

「実は、あの、先ほど……」

たこ焼きを置き、代わりにゲーム機を持ち去った女。「明日良様に許可はいただいてあります」と平然と言い、どこに持って行くのかは告げなかった。一体彼女は何を考えているのか、何がしたいのか。あの掴み所の無い同僚のことが、箏子達にはさっぱり理解できなかった。

ソフトは全て残してあるものの、肝心のゲーム機が無くなって少し寂しくなったスペースと、手元のたこ焼きを交互に見て、春比奈は大きな舌打ちを一つした。

箏子達は、寿命が少し縮まったような気がした。

第六話

人気の無い静かな弓道場で、華英(かえい)は一人、的に向かっていた。高校が冬休みに入ってからは毎日、暇を見つけては神宮の敷地内にある弓道場か武道場に足を運んでいる。十六歳を過ぎれば、正月の弓射の儀と、皇帝と巫女姫が立ち会う御前試合への参加が許される。もっとも、織の直系である華英の参加は、本人の意思に問わず決定されているようなものだが、そうでなくとも華英は出るつもりだったし、出るからには織の名に恥じぬよう力を尽くしたいと思っていた。

ここのところは毎日、一日の大半を舞や楽の稽古、大人達の手伝いに費やし、空いた時間は鍛錬に励んでいる。当然、学校で出された冬休みの課題など一ページも進んでない。毎年、三学期開始直前にやっと取り掛かり、期限ギリギリに提出するのが恒例で、もう慣れたものだった。

華英が新たな矢をつがえようとした時、道場内に無機質な電子音が響いた。携帯電話の着信音だ。本宮からの呼び出しかもしれない。華英は急いで画面を開く。しかしそこに表示されたのは、見知らぬ番号だった。不審に思いながらも通話ボタンを押す。

「は」

『もしもし!?華英!?私!!』

ボタンを押した瞬間、はい、と華英が言う前から電話の相手の声がかぶさった。

「……どちら様でしょうか」

『だから私だってば!忘れたの!?』

「『ワタシワタシ詐欺』っていうのも、最近はあるかもしれないよね」

『何言ってんのよ!私の声、わかんないの?』

忘れるはずがない。生まれたときからずっと近くで聞いてきた声。
「……いきなり家出しておいて今更どうしたんだよ、有明（ありあけ）」
その声は確かに華英のよく知るもので、そしてここ十ヶ月近く聞いていなかった声だった。
『違うわ。家出じゃなくて、駆け落ち』
「もっと悪いよ……」
次期巫女姫として最有力候補に居ながら、巫女姫の引退宣言の直前に突如行方をくらました彼女の名は、古谷有明（ふるやありあけ）。旧名、織有明。

＊＊＊

「で、駆け落ちした不孝者が何の用？」
『いやー、もうすぐ正月じゃん？そっちはみんな忙しいだろうなー、と思って』
「そりゃもうめちゃくちゃ忙しいよ。誰かさんが居ないおかげで余計にね」
『華英は今度、初めての弓射の儀でしょー？どう？的中できそう？』
「自分に都合の悪いことには耳を貸さないところは相変わらずだね」
『ありがとう』
「褒めてない」
『華英は元気？』
「ほんっと、人の話聞かないね。僕は今、誰かさんのせいで精神的にかなり疲れたよ」

『そっか、元気なんだ。よかった』
「全く……まあいいや。元気だよ」
『みんな元気？』
「最近忙しいからあんまり見てないけど。元気だと思うよ。父さんも母さんも。先代も。藍杷那（あいはな）も頼彦（よりひこ）も明日良も――」
『春比奈も？』
「元気なんじゃないかな。忙殺されてるけどね」
『巫女姫として初めての新年だからねえ。大変だろうなー』
「何だよ、他人事みたいに」
『だって、もう他人事よ。私はもう織の人間じゃない』
「薄情だな。春比奈がどんだけ大変だったかわかってんの？」
『想像つくわ。でも、春比奈なら大丈夫って、私わかってたもの』
「巫女姫としての立ち居振る舞いがなってないって陰口叩かれてんのに？春比奈が巫女姫に任命されるなんて誰も想像しなかった」
『私はずっと思ってた。私なんかよりずっと向いてるって。春比奈がなるべきだって』
「どうかな。春比奈は祷詞（とうし）もろくに暗記してないんだよ」
『巫女姫に必要なのはそんなものでも、立ち居振る舞いでも無いわ』
「何が言いたいの？」
『まあ、その内わかるわ。それより華英、肝心なこと言ってないじゃない』
「何だよ、みんな元気だって――――」
『“あの子”は？』
「……元気そうに、見えるよ。少なくとも、平面上は。と言っても、遠目に見るだけだからわからない」
『ふうん……』
「って、ちょっと待って。なんで帰ってきたこと知ってんの？」
『“オカアサン”とは、たまに電話するから。その時に、聞いたの』
「あ、そう……」
『あの子と話す？』

「いや、全然。避けられてるっぽいし」
『春比奈とは仲良くやってるのかな』
「嫌われてるって噂だよ」
『意地っ張りだもんね』
「どっちが？」
『どっちも』
「……否定はしないけど。でも僕だって、まだ納得してないんだよ」
『華英。あの子は、自分の意に反したことはやらないわよ。反対に、自分がやると決めたら、誰が反対したって突き進むわ』
「それは知ってる……けど。でもやっぱり僕は嫌なんだ」
『まあ、あんたはそうでしょうねえ』
「なんでそこで笑うの」
『あんたも可愛いわねえ』
「うるさいな」
『ま、今はあの子のことは放っておきなさい。大丈夫だから。それに――――適任でしょ？』
「それも、否定はしないけど。でもさー、やっぱりさー……だから、笑うなって！」
『ごめんごめん』
「全く……。ねえ有明、僕に電話するくらいなら、藍杷那にもかけたらどうなの？」
『一度、かけてみたのよ。有明ですけどって言い終わる前に切られちゃった』
「藍杷那らしいね」
『おかげで藍杷那は変わりないっていう近況だけはよくわかったわ』
「父さんや母さんとは？」
『まだ。今、忙しい時期だし。迷惑かけたくない』
「一応、気を遣うんだ？」
『私だって、育ててくれた養父母には孝行したいと思ってるのよ』
「血の繋がらない弟には孝行しないでいいの？」

『別に……』
「ひどいね、姉さん」
『あんたは別に、私の手なんか必要としてないじゃない』
「どうかな」
『あんただけじゃないわ。もう織の宮にも、私は必要無いのよ』
「……そんな自虐的なこと言う人だったっけ」
『自虐じゃなくて、事実よ』
「……だからって。あんなに唐突に消えなくてもいいだろ。僕達がどれだけ……」
『あ、心配してくれてた？』
「誰がっ！みんな怒ってたんだよ！藍杷那なんか般若になってんだからな！」
『いやー、みんなが私のこと愛してくれてるのは知ってるんだけどねー。でも私は今ダンナ一筋だしねー』
「人の話を聞けよっ！」
『華英。私、幸せよ？』
「……」
『声聞けば、わかるでしょ？』
「……そんなら、顔見せに来るくらい、しなよ」
『まあ、その内ね』
「ついでに藍杷那に殴られればいい」
『まあ、それも、その内にね。年明けて、落ち着いたらね』
「ただ手伝わされるのが嫌なだけなんじゃないの」
『それもあるけどー……。私、もうすぐ臨月なのよ』
「……は？」
『だから、宮を出た時には既に妊娠してたの。だからあんなに急いで出たのよ』
「……それ、父さんと母さんは、知ってるの？」
『知ってるわよ。“オカアサン”も知ってる』
「……そう」

『うん、だから行く時は、親子三人で行くわ』
「多分旦那はボコボコにされると思うんだけど、それでもいいの？」
『覚悟はしといてって言っといたわ』
「庇ってやらないんだね」
『織の洗礼を受けることも必要だと思うの』
「怖いこと言う嫁だね」
『とりあえずー、こっちのことは心配しないでって、みんなにも伝えといて』
「はいはい……ねえ有明、せ――――」
『そして。あんたは余計なこと心配し過ぎずに、今は自分のことに集中しなさい。今年も、舞と楽、やるんでしょ？そして何より初めての弓射と御前試合。あと、勉強。折角いい学校に入ったんだから』
「わかってるよ。でも」
『あの子は強いわよ？』
「強がりなだけだよ」
『でも、私よりはずっと強いわ』
「そうかな」
『あの子は私の……“妹”じゃないもの』
「……ちょっと。それどういう意味」
『そのままの意味だけど？じゃ、そろそろ切るわ。頑張ってね』
「ちょっと待ってよ姉さん、おい、有明っ！……あー、もう……
…」

自己中心的なところは少しも変わらない。心配させるだけさせておいて。
しかし姉の幸せそうな声を聞くことができて、華英は安堵していた。

そしてそんな有明が、当然のように彼女を“みんな”の中に入れていることが、華英には嬉しかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1396ba/

水上の綾

2012年1月5日00時49分発行